

9月14日（月）ヘブル人への手紙4章1節

「こういうわけで、私たちは恐れる心を持つわけではありませんか。神の安息に入るための約束がまだ残っているのに、あなたがたのうちのだれかが、そこに入れなかったということのないようにしましょう。」

旧約聖書で、イスラエルの民は約束の地カナンに入ることが約束されていましたが、実際にエジプトから導き出された彼らは、昨日も見たように、その安息に入ることができませんでした。しかし、「神の安息に入るための約束がまだ残っているのに」とありますように、カナン入植はあくまで終末論的安息の予表であって、ヘブル人への手紙には、「堅い基礎の上に建てられた都」（11章10節）「天の故郷」（11章16節）「生ける神の都である天上のエルサレム」

（12章22節）「揺り動かされない御国」（12章28節）と、さまざまなかたちで終末論的安息が出てまいります。つまり、「神の安息に入るための約束が残っている」とは、新約の時代の神の民が、イエス・キリストの十字架の贖いによる信仰を通して、永遠の霊的な安息に入ることができることを意味しているのです。そのような神からの恵みが与えられているからこそ、著者は、四十年間も荒野をさまよい、結局、安息にはいることのできなかったイスラエルの民を思い出させながら、「あなたがたのうちのだれかが、そこに入れなかったということのないようにしましょう。」と勧めているのです。入れなかったとは、レースなどでの落伍を意味していますが、「入れなかったということのないように」とは、入れなかったものと分かる、判明するということです。つまり、自分では安息に入れると思いついていても、主の目から見て、「神がご自分の安息に入らせないと誓」（3章18節）われるような歩みをしてはならないということです。

冒頭の「こういうわけで」は、3章16～19節の不信仰により約束の地に入ることができなかったイスラエルの民を指していると考えられます。彼らが安息に入れなかったのは不信仰のためであったことが分かります。イスラエルの民には恵みにより約束の地カナンという安息の場が備えられていましたが、みことばに従うべき時につぶやき、神に対して不服従を選び取りました。それとは逆に神を恐れるとは、すべてを主の主権にゆだねつつ、謙遜に神に従うことです。そして、もしすべての者が恐れる心をもって神に従うなら、神の安息に入れないということはありません。ともに神が約束された安息に入れるように歩んでまいりましょう。

9月15日（火）ヘブル人への手紙4章2節

「けれども彼らには、聞いたみことばが益となりませんでした。みことばが、聞いた人たちに、信仰によって結びつけられなかったからです。」

最初に、「私たちにも良い知らせが伝えられていて、あの人たちと同じなのです。」とされています。つまり、ここでの「良い知らせ」とは、1節の「神の安息に入るための約束」のことです。昨日も見たように、旧約と新約でかたちは異なりますが、神の安息に入るための約束が良い知らせとして伝えられたことは間違いありません。ですから、伝えられたということについては「あの人たちと同じなのです。」と言います。そして、大事なことは伝えられた良い知らせにどのように応答するかということです。私たちも、人に何かを伝える時には、必ず応答を期待するはずですが、それは主なる神様にとっても同じことです。

続いて「けれども彼らには、聞いたみことばが益となりませんでした。みことばが、聞いた人たちに信仰によって結びつけられなかったからです。」とされていますが、彼らとはイスラエルの民のことです。信仰は、神が語るみことばとそれを聞く人とを結びつけるものです。信仰によりみことばは、その人たちのうちにとどまり、生きて働き、それに従うことで、神様からの祝福を受けることができます。逆に、みことばが信仰により結びつかなければ、神への不服従や背きとなって表れ、それは疑いや不信を生み、最後には罪となっていきます。実際に、イスラエルの民は、モーセを通して与えられた神のみことばが、信仰によって彼らに結びつかなかったため、約束の地、安息の地であるカナンに入ることができず、本来受けるべき祝福を受けることができなかったのです。

ここから次のことを考えましょう。まずみことばを聞く人とみことばを聞かない人の間には大きな違いがあります。まずは、みことばを聞きましょう。二つ目が、みことばを聞いてもそれが信仰によって結びつけられるかどうかで大きな違いが出てまいります。結びつくとは、つながるとか一つになるということです。私たちは、みことばが信仰によって結びつけられ、つながるように、主によって信仰を強めていただきましょう。そのように、みことばが信仰によって結びつけられるなら、みことばが私たちのうちに生けることばとして働き、神様の約束が私たちのうちに現実のものとされていきます。その中にあって、私たちの行動も考えも意思もすべてが信仰によってみことばと一つにされていきます。そのようにして、私たちのすべてが信仰により変えられていくのです。

9月16日（水）ヘブル人への手紙4章3節

「信じた私たちは安息に入るのですが、「わたしは怒りをもって誓った。『彼らは決して、わたしの安息に入れない。』」と神が言われたとおりなのです。もっとも、世界の基が据えられたときから、みわざはすでに成し遂げられています。」

3章18節で「また、神がご自分の安息に入らせないと誓われたのは、だれに対してですか。ほかでもない、従わなかった者たちに対してではありませんか。」とされていますが、4章3節で再度「わたしは怒りをもって誓った。『彼らは決して、わたしの安息に入れない』と神が言われたとおりなのです。」と繰り返されています。これは、恐らく「信じた私たちは安息に入る」ということの対照を際立たせようしているのでしょう。つまり、安息に入るのは、ただ信じることによってであり、それは神の恵みによるということです。

「もっとも世界の基が据えられたときから、みわざはすでに成し遂げられています。」とありますが、まさに「信じた私たちは安息に入るのです」と言われている安息が、創造のみわざが成し遂げられた後に神が経験なさった安息を私たちも経験するということです。ですから、信じた者が入る安息とは、すべてが完成した時に味わうことのできる安息と言えます。創造のみわざを成し遂げられた主なる神は、救いの完成を成し遂げようとしておられます。イエス様が、もう一度この地上に来られた時に、すべての罪や悪は滅ぼされ、そして主にあって亡くなった者たちは、新しいからだ（栄光のからだ、朽ちないからだ、御霊のからだ）によみがえらせられ、そこで主とお会いすることとなり、その後新天新地にあって永遠の安息を経験することとなります。多くの方は、永遠の安息とは、この世でのつらい生活を脱してからたどりつく、楽園のような所と考えています。しかし、ここで経験する安息とはそれ以上であって、人が神との関係が回復し、罪や悪によって悩まされることがなく、喜びをもって主をほめたたえ、心から礼拝し、永遠の平安と喜びをもって歩ませるものなのです。

信じた私たちに恵みによってこのような幸いが与えられていることに心からの感謝をさげましょう。

9月17日（木）ヘブル人への手紙4章4～5節

「なぜなら、神は第七日について、あるところで、「そして神は、第七日に、すべてのわざを終えて休まれた。」と言われ」（4節）

3節に「もっとも、世界の基が据えられたときから、みわざはすでに成し遂げられています。」

とされているように、天地万物の創造のわざは六日間で完全に成し遂げられ、なさっていたわざの完成が告げられて、4節にありますように神様は七日目にすべての創造のわざを休まりました。ですから、安息は確かに存在しますし、「信じた私たちは安息に入ります。」とありますように、イエス・キリストが再臨される時に、被造物が新たにされ、回復し、すべての罪が取り除かれ、世界が再び完全なものとされるときにもたらされます。ですから私たちは救いによる安息を経験しただけではなく、永遠の安息に入ることを信じています。その信仰により私たちはイエス様の現れを日々待ち望みながら歩んでいるのです。

5節で「そのうえで、この箇所で、「彼らは決してわたしの安息に入れない。」と言われたからです。」と、3節での引用を強制的に繰り返しています。なぜ、そこまでして強調するのかと申しますと、1節に「神の安息に入るための約束がまだ残っているのに、あなたがたのうちのどれかが、そこに入れなかったということのないようにしましょう。」とありますように、安息に入れない者がいないということです。信仰は従順を生み、不信仰は不従順を生みます。ですから、不従順になって安息に入れないということではなく、むしろ信仰の従順さをもってともに安息に入ることが勧められているということです。しかし、私たちが、安息に入ることが許されていることは、神の私たちに対する驚くべきあわれみと恵みの結果です。そして自分の努力や熱心さで何とかして安息に入るように努めるということではなく、神が恵みにより私たちの信仰の歩みを守り、支えてくださることにより、私たちも安息に入ります。信仰は、神の恵みによって始まり、恵みにより完成させられることを信じて、主に心からの感謝をささげたいと思わされます。

9月18日（金）ヘブル人への手紙4章6、7節

「ですから、その安息に入る人々がまだ残っていて、また、以前に良い知らせを聞いた人々が不従順のゆえに入れなかったのも、」（6節）

まず6節で語られていることは「その安息に入る人々がまだ残っていて」ということです。イスラエルの民、すなわち16～19節において神がご自分の安息に入らせないと誓われた人たち、不信仰のゆえに安息に入れなかった人たちです。この人たちのゆえに神は決して安息の約束を反故にすることなく、安息に入る者を残してくださったのです。

その後で「以前に良い知らせを聞いた人々が不従順のゆえに入れなかったのも」と、神が約束された安息の地、すなわちカナンに入ることができなかったのは不従順の故であることがもう一度語られ、不従順にならないようにと戒められています。

7節に「神は再び、ある日を「今日」と定め」とあります。ここで言われている「今日」とは、詩篇95篇7, 8節で言われている今日のことです。つまり、「ある日」として神が御声をもって語られ、その主からの語りかけを人々が聞く日を、神はみこころによって定めておられるということです。まさに、その時に不従順になることなく、信仰をもって応答すべきと警告するために「今日、もし御声を聞くなら、あなたがたの心を頑なにしてはならない」と言われているのです。そして、神の御声、すなわち聞いたみことばに信仰をもって応答し、安息に入る者たちが残された安息に入る人たちです。しかし、私たちが忘れてはならないことは、信仰も神からの賜物であって、神の選びにより安息に入るために残された人々に神は恵みとして信仰を与えてくださるのです。そして、3節に「信じた私たちは安息に入るのですが、」とありますが、安息に入るように定められている私たちも、日々主の御声を聞き、それに信仰をもって応答することで、周りの人たちにも私たちは主の安息に入るように定められている者であることを証ししたいと思わされます。

9月19日（土）ヘブル人への手紙4章6～10節

「したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残されています。」（9節）

6節で「もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであれば」と言っていますが、モーセと同世代のイスラエルの民は四十年間荒野をさまよい、結局約束の地に入ることはできませんでした。が、その後の世代になってヨシュアがリーダーとして民を導き、イスラエルの民は約束の地カナンに入ることができました。しかし、ヘブル書の著者は、「もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであれば、神はその後に別の日のことを話されることはなかったでしょう。」と、神がある日を今日と定めたのは、ヨシュアに率いられたイスラエルの民が、安息の地へ入ったことを指しているのではなく、別の日のことを神は話されたのだと語っています。つまり、ヨシュアを通してカナンに入ったことは、後の時代に与えられるべき安息の型だということです。ですから、9節で「したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残されています。」と言います。ここで言われている神の民とは、信仰による神の民です、すなわち、イエス・キリストを自分の罪からの救い主として信じる人々の共同体のことであり、信仰により彼らは安息に入ることが許されます。そして、この神の民は、不信仰により約束の地に入ることができなかったイエスからエルの民のようではなく、信仰により安息に入る人たちなのですが、まさにこの者たちは、謙遜に神のことばに耳を傾け、そのことばに従う人たちです。また「不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がなく」（3章12節）に互いに祈り合い、励まし合っている者たち

です。確かに、神の民として世にあって生きることは、それほど簡単なことではありませんが、私たちには安息日の休みに信仰によって入ることができることを信じて、信仰の戦いをともに戦ってまいりたいと思わされます。

9節の「安息日の休み」というのは、4節にありますように、第七日目に神がすべてのわざを終えて休まれたことを指しています。10節に「神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです。」とされていますが、私たちもイエス・キリストを信じる信仰により、神がご自分のわざを終えて休まれたように、いつの日にか人生のすべてのわざを終えて、休む時が恵みにより、信仰によって与えられていることは幸いです。そこに私たちの地上の歩みの先の希望があるのです。そして、自分のわざを終えて休むとは、地上でのわざを終えるということであり、天に帰ったなら、そこで私たちは永遠に神に仕える働きが与えられていて、それもまた大きな恵みです。このような恵みを忍耐をもって保ち続け、信仰により約束されている休みにともに入りましょう。

9月20日（日）ヘブル人への手紙4章11節

「ですから、だれも、あの不従順の悪い例に倣って落伍しないように、この安息に入るように努めようではありませんか。」

まずここで「努めようではありませんか」との勧めがあるということは、安息に入ることは、それほど簡単なことではないことを示唆しています。特に、「不従順の悪い例に倣って落伍する者がないように」とありますが、不従順の悪い例とは、不信仰のゆえに約束の地カナンに入ることができなかったイスラエルの民のことを指していると思われそうですが、彼らと同じように不従順になって落伍する者たちが実際にいたことを、ここでヘブル書の著者は指摘しているのかもしれない。3章12節でも「あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。」と繰り返し言われているとおりです。

私たちを安息に入らせないように攻撃するのがサタンです。私たちを誘惑し、私たちを信仰の道から引きずりおろそうとします。それこそ不従順になったイスラエルの民のように、私たちの心を迷わせ、信仰の道に従わせないようにし、信仰の落伍者を数多く出そうとすることが彼らの働きの目的です。ですから、私たちは信仰の歩みの中で力を尽くして努めてサタンと戦わなければなりません。また、私たちがイスラエルの民のように先の見えない荒野のような困難な中を進む時に、私たちは不従順になったり、不信仰になったりします。そのような中であってもなお、信仰を持って進んでいくためには忍耐が必要です。その忍耐は、私たちが御国の

完成の時に与えられる永遠の安息を思い見る時に与えられるものです。永遠の安息に入る希望が与えられていることを感謝し、日々の歩み中で何があっても忍耐をもって進んでまいりましょう。そして私たちの信仰の歩みは決して孤独なものではありません。神様があわれみと助けを常に与えてくださいます。また、3章13節にありますように、私たちにはともに励まし合う兄弟姉妹が与えられているので恐れる必要はありません。私たちにすばらしい安息の約束が与えられていることを思い、感謝しつつ、不従順にならず、最後まで忍耐をもって従順に主に従い、信仰の戦いをともに戦い、ともに永遠の安息の希望を告白し合いながら進んでまいりましょう。